

その日、桃花は曇った気持ちで午後練を終え帰宅したが、月乃はバイトがあるため不在だった。適当に夕食を済ませて学校から直に職場へ向かったらしい。

いつものようにしっかりと手洗いながいを済ませてリビングに向かうと、テーブルに湯気を立てた食事が置かれていた。ご飯と焼き鮭に煮物、素朴な定食屋のメニューにありそうだ。

「さ、早く食べちゃいなさい。今日の煮物にはね、隠し味で生姜が入ってるからあつたまるわよ」

台所から出てきた母親が得意げに言った。これから塾なので、親より一足先に夕食を摂る。テレビをつけると、まだどの局も似通ったニュースを流していた。

熱々のご飯とは逆に、冷めた視線でロボットのようチャンネルを切り替えていくと、画面の右上に「私を探して！ 冬のテレビ大捜査2016冬」と表示された。行方不明者の情報を流し、視聴者からの有力情報を得る番組のようだ。興味深くて見入ってしまった。数年前、公園で下の子に気を取られているうちに上の息子を見失ってしまった家族の特集をやっていた。ビラ配りや個人的な搜索を行いつつ、我が子の無事の帰宅を信じ、来春の入学に合わせてランドセルを購入したというエピソッドが流れた後、ネットでの心無い言葉の数々を暴露していた。

自分に非があったことなど誰よりも分かっているはずなのに、追い打ちをかける人がいることに憤りを覚えた。

「お姉ちゃん……」

テレビの中の家族が、月乃に重なった。彼女は未来へ進む覚悟をし、成人式をきっかけに謝罪することを望んでいたものの、「勇気がない」と書いていた。きつと彼らと同じように過剰な攻撃を受けることを恐れているのかもしれない。月乃の敵が数百にも及ぶなら、力はわずかながらもブルーギルズのみんなでそれに対抗しなければならぬ。桃花は急いでご飯をかきこむと、涼花と綾音の待つ塾へ向かう支度を急いだ。

放課後、話は早かった。というのも月乃は手紙をスマホで撮影して綾音や木ノ道中の二人にも送っていたためだ。

「弱肉強食っていうのは極端だけど、世の中努力よりも結果重視なのは間違っていないと思うんだよね」

綾音は職員室の脇の壁に貼られたポスターに目をやった。それぞれの学校でトップテンに入った生徒の名前が張り出される。

桃花と涼花もポスターを見た。二人は鈴蔵中のそれぞれ五位と三位だが、綾音に関しては二人とほぼ同じ点数を取っているのに風島中の九位。二人より一回り小さな

文字で隅の方に記載されていた。綾音は唇を噛んだ。生まれた場所が数キロ違うだけで評価が変わってしまうことにやるせなさを覚えていた。

「手紙の内容が事実なら月乃さんがやってことは相当やばいけど、背景が背景だけに責められないんだよね」

涼花が靴紐を直しながら言った。  
「逆境にめげず自分の信じる道を生き抜こうとしたのに、皮肉にもそれが生きづらさを増やすきっかけになっちゃったなんて、切ないよ」

涼花の言葉を聞いていた綾音は、拳をぎゅっと握って俯いた。

「月乃さんはとりあえず部活の関係者には謝罪しなければならぬとは思うけど、その他大勢が厄介だよね」

涼花は腕を組み、壁にもたれかかった。

「うん。とにかく数が多いから、どんどん話大きくされてて収集付かなくなってるそうだよ。お姉ちゃんを殺人鬼扱いするんだよ。ひどくない？」

桃花は心臓をおさえて顔をしかめた。

「あいつら頭悪いよね。運動部員ならさ、誰だって一回くらいは試合で誰かを負かしたことがあるだろうに。それを悪にするなんて、特大ブーメランじゃん！」

涼花は感情が高ぶったせいか舌打ちをした。

「つまりは、肉料理を食べながら、テレビでシマウマがライオンに襲われるシーンを見て『かわいそう』って言

ってるのと同じようなもんだよ。おかしいよね」

続けてそんなたとえ話も出して、涼花は月乃を擁護した。

姉の愚行を知りながらも、それでも彼女の味方であり続けようと仲間たちを見て、桃花は言葉にできない喜びを抱いていた。二人に気づかれないようにこっそりと涙を拭いた。

そのころ……

「春山さんお疲れ様。最後に、処分する古いテキストを塾長の机の上に移しておいてください。ええと、硝子戸の一番下の段に入ってるやつです」

「はい！」

塾長は月乃に仕事を頼むと、最終コマの生徒を見送りに行った。男子中学生三人組が幼稚なやりとりをしながら靴を履いて階段を降りて行くのを

「こらこら、静かに降りようねー」

と、小学生でも指導するかのよう論しながらついていった。月乃のバイト先は、桃花たちの通う大手と違って小規模の塾で、講師が安全のために夜はある程度のところまで付き添ってやるのだ。

「さようならー」

月乃も三人に声をかけたあと、職員室の戸棚の方へ向

かった。中には塾のオリジナルテキストが並べてある。扉に「年末に処分」と書かれたポストイットが貼られていた。

ガラス越しに背表紙を見ると、どれも西暦が書かれていた。一番最近のもので月乃が中三の頃のものだった。「やっぱり古いのかあ……私が中学生だった頃の時代って」

ふとした瞬間に、世界は確実に未来へと歩みを進めていると実感する。五年前より電化製品のスペックは上がってるし、壊滅的な災害が起こった土地にも希望が舞い込み始めている。自分だってそろそろ……月乃は窓の向こうの青白い星を見つめた。そして、一呼吸置いてから作業をこなしした。

肉体労働を終えて体を伸ばしていると、教室に残っていた英語担当の女性講師も、両手を組んで頭の上でピンと伸ばしながら月乃の側へやってきた。

「はあ。静かにしてって注意はするものの、こうしてみんな帰っちゃうと寂しくなるもんだねー」

おそろく四十路はすぎている彼女は、哀愁漂う笑い声をあげた。

「春山さんも、昔は意外とあんな感じだったたりした？どんな中学生だったのかな？」

「えっ、あ、あの……」

嫌いな質問の一つだった。

「んふふ？ ワクワク」

いい歳した女性が、子供のようになんまりと月乃を見つめていた。答えに期待しているようだ。

「まじめな方だったと思います」

「ふーん。今と変わらないのね」

あんなに興味を示していたのに、そっけない感想を漏らした。つまらないことを言ってしまった。ドン引きされるかもしれないけれど、桃花たちに宛てた手紙と同じことを正直に話した方が「おもしろいアルバイトさん」でいられたのかもしれないだろうな、と思った。でも、事実を打ち明けたら周りから人が離れていく気がして正直に振舞えなかった。

桃花たちは何を思ったのだろうか。バイトが終わってスマホを見ると、仕事中に届いたのか、いくつものメッセージが表示されていた。レポートを書き上げたけど趣旨がずれてないか不安だから、アドバイスをくれという友人からの相談に、サークルのクリスマス会の打ち合わせ。桃花からのメッセージは……スマホを持っていないので送られてくるはずがなかった。ため息をついたあとで、何かをひらめき綾音にメッセージを送った。

アルバイト先の塾は春山家から徒歩圏内なので、いまだ街中の塾で井戸端会議をしている妹よりはるかに早く帰宅した。

月乃の話は一旦切り上げて雑談をしていた三人だった

が、綾音のスマホの着信音が鳴ると、すぐに反応した。

「ふむふむ」

綾音は秒で文字を打ち始めた。

「何があつたの？」

桃花が何気なく聞いた。

「月乃さんから桃花に伝言。明日の夜ゆっくり話したい

ことがあるって」

「話。やっぱり手紙のことだろうな」

桃花は相変わらず勘が鋭かった。

「でもお姉ちゃんの過去の予習はばっちりだし、ちゃん

と向き合えそうだな」

テストに塾で対策した問題が出た時のように、強気な

表情を見せた。口には出さなくても「もう何も怖くない」

と言おうとしているのが二人には伝わってきた。

「私はお姉ちゃんのことをもっと知りたいし助けない。

待っててね。私は絶対にお姉ちゃんの希望の星でいつづ

けるからね」

桃花は窓辺により、ブラインドの隙間を覗いた。ちょ

うど駐車場に車が入り込んできて、目をつんざくような

ヘッドライトの閃光が校舎内に飛び込んできた。

次の日、月乃はキャンパスにいた。

「早く早く！ 学食の席なくなっちゃう！」

「ここからだに近いし焦らなくても大丈夫だって」

チャイムが鳴って校庭に飛び出そうとする男児のよう

に、友人の一人、藍が荷物をまとめていた。大学のスぺ

ルが入ったウインドブレーカーの上からリュックを背負

い、バドミントン部で使うラケットを、魔法の杖のよう

に握った。ケースにつけられたフェルトのマスケットが

小刻みに揺れた。

「もー、藍ちゃんは食いしん坊なんだから。成人式まで

には痩せるって宣言しておいて変わってないじゃないか

ねー月乃」

もう一人の友人である悠海ゆうみが、月乃の肩にドンと左肘

を置いた。空いた右手には藍と同じくラケットが握られ、

色違いのマスケットが笑っていた。理想の運動部って感

じだな……月乃はそれを見てぼんやりしていた。二人の

シルエツトが、中学時代帰り道が同じだった二人の部員

と重なった。背丈も髪型もなんとなく似ていた。しかし、

すぐに透き通って消えていった。自分が暴走を始めてか

ら帰りは一人になった。

「月乃、生きてる？ おーい！」

悠海が月乃の脇の下を襲った。くすぐったさで月乃の

意識は2016年に戻ってきた。

「あ、それな。えっと、話変わるけど、そのマスケット

かわいいなって思ってたさ」

迷わず指摘した。

「ああこれ？ バドミントン部のキャラクター。先輩が考えて、うちの分を作ってくれたんだ！」

ケースを並べ、二人そろって月乃に見せつけた。

「月乃ちゃんも、バドミントン部入ればよかったのに。文藝部となら全然兼部できちゃうんだもん」

口をそろえて言った。

「ごめんね。体験入部は面白かったけど、やっぱり私、創作の方極めたかったからさ」

半分本気で半分嘘だった。

「まあ決める権利は月乃にあるんだし、責めたりしないよ。部活が違ってたってうちら友達だもんね」

「そうそう。ずっと友ずっと友」

月乃を真ん中にして三人で肩を組んだ。今でも十分仲がいいけど、同じ部活に入っていたらかけがえのない時間をもっと濃密に過ごすことができたんじゃないか？ どうしても考えてしまい、満たされなかった。けれど、二人を守るためにそうせざるを得なかった。

「じゃあ、二人とも何があっても私の前からいなくならないよね？」

留守番を任された幼児のように二人にすがりついた。

失うことが怖かった。

「当たり前だよ」

「月乃らしくないこと言うなあ。ずっと友を信用しないと

か一体どんな世界線の住人なんだよー？」

中学時代のことなど知るはずもない悠海が月乃を茶化すように肩をはいた。

「それにしてもおなか減ったー。悠海も月乃も、豚丼大盛りおそろで行こうな」

「もー。懲りないんだから！」

悠海がビシッと叱った。月乃は小さな幸せをかみしめるように微笑み、二人を見守った。そして、腕時計を見た。中学生はまだ授業を受けている頃だなど桃花に思いを馳せた。

結局、三人で大盛り豚丼を頼んだ。この日はかなり冷え込んだので本当はラーメンが食べたかったものの、自分の意見をぶつけたら幸せが逃げてしまいそうなので、素直に合わせた。

「月乃、無理にうちらに合わせなくていいんだよ。なんかいつも我慢してるように見えるからさ」

注文の待ち時間に、おかずのショーケースを眺めながら藍が言った。藍と悠海は気が合うのか、二人とも同じサラダを取った。

「いや、我慢なんかしてないよ。せっかくみんなでご飯食べるなら、同じもの選んだ方がおいしいし」

本当は節約したかったけど、仕方なしにサラダに手を伸ばした。自分一人が違う選択をするのは罪だと思うようになっていた。

よほどお腹が空いていたのか、食事の間しばしば会話が途切れた。心を込めてつくられた豚丼をゆっくり味わっている、二人がまた例の部員に重なった。まだうまくやっていたころの大会、「団体戦、また一回戦負けだったね」と笑いあって弁当を食べたのを思い出す。

私、もう一回幸せになっていいのかな？ 月乃は天に聞いた。

学食を出て三人でキャンパスを歩いていると、反対側から友人たちのドッペルゲンガー、ではなく、同じ装備に身を包んだバドミントン部員が現れた。

「あ、<sup>なぎさ</sup>風咲ー！」

ずっ友の二人は、一人でいた戦友の姿を捉えると、月乃そつちのけで彼女の元に飛び込んでいった。よくあることだ。こういう時、月乃は少し離れたところから天然記念物のように見守るのであった。三人は月乃には理解できない部活の話をしていた。ここで焼きもちを焼かないあたり、やっぱり大人になったんだなと実感した。

「あ、この子って誰だっけ？」

風咲という子が、様子を伺っている月乃に気づいて藍に聞いた。

「国選の月乃ちゃんだよ」

「あー、前にも藍から聞いてた気がする。確か文化系サークルに入ってるんだよね」

ポニーテールのよく似合う、目のくりつとした美女に顔を近づけられて、天使に捕まった悪魔のような心地がした。

「あ、あ、どうも……」

怖気づく彼女をよそに、風咲は月乃のつま先から脳天までくまなく観察していた。

「月乃ちゃん、絶対運動得意でしょ？ 私幼稚園の頃からいろいろスポーツやってきたから、見ただけで分かるんだよね。すごいでしょ？」

ふふん、と得意げに鼻を鳴らした。

「お、お！ 風咲が仲間に入れたそうに月乃を見ているぞ！」

悠海が興奮気味に言った。きらきらと透き通る風咲の瞳と目が合ってしまった。吸い込まれそうな色をしている。卓球部員だった過去まで見透かされているような気がして、底知れない恐怖を感じた。

「でも、私に関しては能力が見た目に伴っていないからなあ。それに今から入ってもお荷物になるだけだし……まあ考えとくよ」

ようするに入るつもりはなかった。この前自主学習で、非行少年の再犯率が高いことを学んだ。自分の犯したなんちゃって恐喝罪、殺人罪を思い出す。いくら反省しても、月乃が月乃であることは変わらない。更生したつもりでも、何かのきっかけで内なる悪が甦ることだって十

分であり得る。だから、もう二度と運動部には関わらないと決めていた。

「うーん、やっぱり月乃は硬いや」

口をとがらせて悔しがっている風咲を、藍が励ました。

「あ、うちらこのあと部活でミーティングがあるんだ。

ごめん」

悠海が思い出したかのように謝った。

「了解。じゃあここでバイバイだね」

もつと一緒にいられないのは寂しいけど、自分で決めた道なんだから受け入れるしかない。同じ部活のメンバーと仲間割れするよりずっとマシだった。

「じゃあまた明日！」

「フルコマ乗り切ろうな」

お互い見えなくなるまで手を振りあつた。

「マネージャーも募集中です！」

風咲もちやつかり加わって、しぶとく勧誘してきた。

硬いのはどつちだよ、と突つ込みたくなった。おかしくてちよつと笑ってしまった。

木々に囲まれた小径を抜けて、月乃は自分の檻に戻つていった。

狭い軽自動車の中で、ガムを二つ口に入れてから走り出した。桃花の待つ家へ早く帰ってあげたくなった。

「二人ともなんか変よ。随分よそよそしいじゃない」

一家四人での食卓、月乃と桃花が調味料をやり取りする時の様子がいつもと違うのを不審に思った母親が訊ねた。このあと大切な会合を控えているので、互いに緊張していた。

「別に。何もないよ」

「ならいいんだが」

父親は、ひげの剃り跡を指先で搔いた。

月乃がポーカーフェイスで応じ、焼き魚をつついた。

あまりにも上手い欺き方だったので、父親もすんなり信じてしまった。

「それより今日先生がさ……」

ダブルスで相手のミスのカバーするように、桃花が両親の注意を反らさせた。

「何それ、面白いじゃん」

缶ビールをコップに注ぎながら笑いが弾んだ。姉妹はその絆で食卓を「いつもの家族団らん」に戻した。

「ごちそうさま」

二人は食事を終えると、歯磨きをするために二人で洗面台に向かった。

「じゃあ、十時ごろ私の部屋に来て」

魚の油がついた手を石鹸で洗いながら月乃が言った。

「んー」

すでに歯磨きを始めていた桃花は、返事をするにも言

葉を発せなかつた。

桃花は歯ブラシをくわえたまま階段を上った。踊り場の窓のところで立ち止まり、背伸びして外を眺めた。真冬の澄んだ空に浮かんでいるのは一ミリも欠けていない満月で、どこからか狼の遠吠えが聞こえてきそうな迫力があつた。

約束の時間になると、あくびを一つしぼりだして、お隣の月乃の部屋へ向かつた。

「はい、どうぞ」

と、予想に反して陽気な声が聞こえた。桃花は普段通りに部屋へおじやました。

「さ、座って座って！」

部屋の中央にあるミニテーブルへと誘導されたので正座をすると、月乃がリュックから何か取り出してテーブルに持ってきた。ポテトチップスとオレンジジュースのペットボトル二つだつた。

「お母さんとお父さんには内緒だよ」

小学生のような無邪気な笑顔を見せて、パーティー開けすると思つたら、袋の口を少しだけ開け、桃花に手を差し出すように指示した。両親にしつつけられていたので、夜中にスナック菓子を食べるのは初めてだつた。袋を開かなければ、親が部屋に入ってきたときやるときにすぐに隠せる。相変わらず月乃には隙がなかつた。

「同じ年齢なのに、実家勢だけ夜食するなのは不公平だ

と思わない？」

桃花より先にポテチをつまんで、大学生ならではの不満を漏らした。

「思う」

同情するふりをしつつ、だったら地元の大学に行かなくやよかつたのに……と思つていた。でも、記憶をたどれば高校の頃のお姉ちゃんは中学と打って変わって下から救えた方が圧倒的に早い成績だつたので、選択肢もやむを得ず少なかつたのかもしれない。

「ごめんね、本題に入る前から愚痴っちゃつて」

月乃はウエットティッシュで指先の証拠を消していた。「あつ、別にお説教とかするわけじゃないから、楽な姿勢でいいよ。ドキドキする裏話、教えてあげちゃうね」

桃花は正座を組みかけていた脚を慌ててほどいた。

「桃花は本当にまじめだね」

姉の言葉に、なんだか照れ臭くなつた。

「手紙、読んでくれたよね。内容はもう把握済みとして進めるよ」

桃花が頷いたのを見ると、立ち上がってクローゼットの方へ行き、重い扉を開いた。こげ茶色の壁の中から風圧とともに独特な酸っぱい香りが飛び込んできた。

「確かここだつたよな」

しゃがんで奥の方を漁つた後、分厚い冊子を、大物の魚のように両腕に抱えて持ってきた。



「これの三十ページを見てごらん」

テーブルに置かれたのは、月乃の中学の卒アルだった。表紙には 2012 と書かれている。言われたページを恐る恐る開くと、色々な部活の集合写真が並んでいた。

「お姉ちゃんはどこでしょう？ はいスタート」

月乃は舌を鳴らして、秒針が進む音をまねて見せた。

桃花はすぐに「女子卓球部」の見出しを見つけ、見覚えのある顔を指さした。

「はい正解。これは簡単すぎましたね」

クイズ番組の司会のように陽気な発言をしたが、その笑顔は張り付けたみたいだった。なんでこんなことをするのか狙いが分からなかった。

「じゃあ、ページをめくってごらん」

湿気で張り付きがちなページに手をかけると、最近誰かが手を付けていたのか、思いのほか簡単にめくることができた。そこには様々な服に身を包んだ部員が、各々の種目に取り組む写真が並べられていた。最後の夏だけあって、真冬の寒さも消し飛びそうな熱気が感じられた。

「はい、それでは第二問、お姉ちゃんはどこでしょう？」

時計もどきの効果音の中で、さつき見た姉が着ていた水色のユニフォームを探した。上から一段ずつ目を凝らしていくと、数枚ほど女子卓球部の写真を見つけられた。集合写真だと、三年生は月乃含めて五人、数を照らし合

わせて行ったが、四人しかいなかった。残る一人が姉と気づくと、焦りながらも一度上の段に戻った。

妹の目線がせわしなくなつたのを見計らうと、月乃は獲物を見つけた狼のように表情を険しくした。

「はい、終了。お姉ちゃんいなかったでしょ？」

思った通りのことを口にされた桃花の手は震えていた。「まあ、手紙読んだなら想像つくと思うけど、私、消されたの。私の愚行の証明だと思ってくればいいよ」

話の筋は通らなくないけど、卒アル担当の生徒が意図的に姉を消しても、先生の最終確認で気づかれないのはおかしいと感じていた。

「これ、偶然のミスじゃないの？ 私の小学校の卒アルだってそういうことあったもん。これだって意図的なんで証拠ないじゃん！」

思い当たる節があるとはいえ、大好きな姉が禁忌として扱われたなんて信じられるはずがなかった。

「桃花、ごめん。私聞いちやつたんだ。先生の陰口。『春山さんが試合をしている写真を見たら、きつと精神に不調を来す生徒も出てくるだろうから、ミスを装ってなかったことにしましょう』って言ってたのを。ほら、うちの親って学校のことには首突っ込むタイプじゃないじゃん？ バレてもクレームこないだろうって魂胆だったんだろうな。しかも私って写真映えするような顔じゃないから撮られにくかったし、仮に苦情来てもカメラマンの

取り忘れてやり過ぎせると思ったんじゃないかな」

組織ぐるみの抹殺、信じがたい事実には桃花は鳥肌を立てた。収まらない悪寒に熱があるのを疑うほどだった。

「私がこの話を聞いたのは冬休み手前あたり……先生は卓球部員だった私の存在を消すのに成功したとお喜びになつていたはず。けれど、私は消えていなかった」

急に小説の冒頭のような語り口で話を進め出したので、桃花は月乃の世界に引き込まれていった。

「どういうこと？」

「同級生や先生とは逆に、私の存在を肯定した何も知らない人が、試合をする姿を文字として残してくれたからだよ」

「写真じゃなくて文字？」

桃花はアルバムを閉じて隅に置くと、オレンジジュースを一口飲んでペットボトルを眺めた。食品表示の欄にはお経のように小さな文字が詰め込まれていた。

「桃花のことだよ」

月乃はアルバムを回収すると、二人の視界に入らないクローゼットの奥へと再びしまい込んでしまった。

「言ってもピンとこないよね。桃花は常に上を目指し続けているから、思い出せなくてもしようがないか」

桃花に「ちよつと待ってて」と言うと、月乃は本棚からクリアファイルを取り出し、市の広報の切り抜きを持ってきた。

「これって！」

桃花の名前と小学校、顔写真とともに、一編の詩が載つていた。

「お姉ちゃんの詩！」

桃花はその紙切れを姉から奪うように受け取ると、まじまじと眺めた。一文字一文字黙読すると、昨日のことのように姉の戦う姿が脳裏に復元されていった。博物館で絶滅種の剥製を見た時の気分になつていた。野山を駆け、今は見られない狼の姿を描き出すように、命を燃やして白球を打つ姉の生きざまがありありと再生された。

「思い出したかな？ 桃花が詩を書いて私の存在を肯定してくれたわけ」

あからさまに喜ぶのものはしたないので、桃花は紙で顔を隠してにやにやした。

「何も知らない桃花は、最後まで私のことを信じ続けてくれた。この詩を読んで感動したし、自分今まで何してたんだらうって考えちゃった。なんか解毒薬飲んだみたいだったな」

「うん。お姉ちゃんに『試合に来ないで』って言われる前までは、毎回応援に行つたなあ。なけなしのおこづかいでバスに乗って、一人で会場まで行つたのも覚えてる！」

天井を眺めながら、小さかった頃の思い出を振り返つた。今思えば、応援を拒否されたところが、姉の暴走開始

の時期だったのかもしれない。

「私を選ばれたのも、審査員を感動させられたからなのかな……」

過去に戻って自分を褒めなくなった。

「そこが大事だと思うの。上手い作品じゃなくて、誰かの心を動かす作品を書くことがね」

「え？」

桃花は深いことを言おうとした月乃に目をやった。月乃はポテチの破片を吸い込んでたいらげると、静かに頷いた。

「桃花の詩を見たとき思ったんだ。私、高校は文藝部に入ろうって。桃花みたいに、誰かの汚れた心に光を注いであげたいなって思ってた。これからは卓球にかけてきたのと同じ熱量で自分の心と向き合って、道を外しそうな誰かを幸せにしたかった」

人を倒し傷つけるために能力を発揮するのではなく、元気づけるために使う。武器の平和利用というところか。自分が生きるべき本当の世界を見つけていたことを知って、桃花の心が温かくなっていった。姉はもう一度進化していた。

「でも、これを私だけの美談にしてはいけなかって思った。あの時、同時に桃花に申し訳ないことをしてしまったって思ってたの」

「どういこと？」

桃花はポテチをつまむ手を止めた。

「最高賞に輝いたあの詩は、作者名や学校名と一緒に永遠に作品集に載り続ける。つまり、私が卓球部員であったこと、そして桃花が私の妹であることがそれなりに証明できてしまう。卒アルに写真がなくても、関係者たちがこれを見れば怪物のような私のことを思い出すだろうね」

桃花は頷いた。春山なんてその辺にごろごろいるような苗字ではないし、小学校名から進学先が鈴藏中であることも簡単に調べられる。

「桃花が私の妹だって分かったら、犯罪者の家族みたいに復讐の手が及んでしまうかもしれない。後ろ指さされて孤立することだってあるかもしれない。そんな目に遭わせてしまったらどうしようってすごい不安だったの」

自分を憎んで生きてきた姉が、ここまで妹の身を案じ、先の幸せを祈り続けていたとは知らず胸が熱くなった。

「社会的な問題だけじゃない。桃花がいつかこの偉業を思い出して、作品を書いた経緯とか振り返った時、被写体の姉が部活でたくさんの人を傷つけて忌まわしき存在にされていたなんて知ったら……宝物のように素晴らしき作品を嫌いになってしまいかもしれない。しかもトラウマになって、大好きな詩が書けなくなったら……それも怖かった」

月乃は膝を抱えて、目を伏せてしまった。

「それが嫌なら、桃花の詩をボツにさせて世に出ないようにすることだつてできたと思う。それでも止めなかったのは、まだ心のどこかに『私が強い選手だったことが、大げさでも神話っぽく遺つてほしい』つてわがままがあつたからなんだろうな。承認欲求を満たすために妹まで利用するなんて凶々しいよね」

月乃は、ぼつが悪そうにこぼすと、オレンジジュースのキャップを転がした。

「お姉ちゃんが私を止めなかったの、正解だったんじゃないかな」

転がつて来たキャップを、そのまま月乃の方へラリーした。月乃は首を傾げながら受け取つた。

「詩が残らなかつたら、写真がないのいいことに罪と向き合うことを捨てて、何も成長できないままだったんじゃないかなあ。のど元過ぎてもつと大きな過ちだつて犯したかもしれない。社会の先生が歴史の時間に似たようなこと言つてた……」

半分先生の受け売りなので、桃花は恥ずかしそうにしていた。でも、その言葉に、月乃は目を見開いた。心に刺さつたのだろうか。

「だつてあの詩は、お姉ちゃんが卓球部にいたことの証明になるでしょ？ ならば見返せばいつでも自分の過ちを思い出して踏みとどまれるじゃん！」

桃花は立ち上がった。

「それだけじゃない。三年間努力できたこと、途中までだったけど仲間と青春できた時間があったこと、頼もしい英雄みたいな選手だったこと。悪いことばかりじゃなくて、いい思い出だつてあるでしょ？ 種から芽が出て、いくつも枝分かれする樹が育つていくように全部思い出せるんだよ。いいことだらけじゃん！」

「桃花……ありがとう。確かにその通りだよ」  
妹を見つめる月乃の目は、朧月のように潤んでいた。

「秘密は知っちゃつたけど、全然悲しくないよ。詩がお姉ちゃんのためになつたなら、すごくうれししいし、まだ小三だつたのに頑張つた自分を褒めてあげたいなつて思つたくらいだよ」

季節が巡つて、枯れ木の蕾が開くように、人間だつて命ある限り再スタートできる。春はまだ遠いが、月乃と桃花はその訪れを信じ、姉妹の絆を確かめ合つてともに前に進むことを決めた。

その時、月乃のスマホに着信があつた。

「こんな時間に誰だろう？」

月乃は画面を伏せて置いていたスマホを手を取つた。  
「珠美からだ！」

その言葉に、桃花も慌てて月乃の手元を覗いた。  
メッセージは数件ほど連続して送られていた。

珠美　こんばんは。夜遅くにすみません。例の計画の件で心強い助っ人の協力を得られそうなんです！

珠美　手紙を読んだら、例の不適切指導の話があったので、ネットでいろいろ記事を調べたんです。どうも選手のご遺族が各地で講演会をされているようなんですがついこの間、私がロボット研究の関係でご縁のある大学でも開催してみたみたいです

珠美　そこで接点のある教授に連絡をとってみたいところ、講演会の関係者に繋いでくれたみたいで彼らと連絡が取れたんです。勝手に外部に話を広げてしまいすみません。でも、月乃さんのことを話したら、えん罪を追わせてしまったのは申し訳ないと思うから、何か相談にのれることがあれば全力でサポートしたいとおっしゃってました！

珠美　ブルーギルズのメンバーで一度顔合わせ出来たらと思うのですが、いつなら都合がつきそうでしょうか？

「すごい……この人脈の広さ。情報通の綾音も顔負けだろうな」

さすがは無限の可能性を秘めているロボット研究者の卵とだけある。

「お姉ちゃん、どうしたい？」

月乃は、一瞬顔をこわばらせた。向こうからの提案とはいえ、間接的に家族を殺した選手の顔を見たら、一生呪われるような気がしてならなかった。彼らを信じていいのか。大いに葛藤した。

「決めた。会いに行く！」

すると、桃花は目を輝かせて拍手した。

「そうこなくちゃ！」

桃花は勢い余ってジャンプしてしまい、一回に足音が響いてしまった。慌てて二人で人差し指を口に当ててから笑った。

行動を起こそうとすれば、味方をする者は自然と現れる。

続く